

---

# 日常な非日常。

水無月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

日常な非日常。

### 【Z-UR-】

Z5264Z

### 【作者名】

水無月

### 【あらすじ】

入学初日から、生徒会と風紀委員のメンバーに目をつけられることとなつた、黒主鴉紀。平凡で目立つことなく学校生活を送りたい。そんな望みはかなうのか。

## はじまり・・・

「続いては、風紀委員からです。風紀委員長、架院隼人さん、副委員長、赤石迅さんお願いします。」

司会の男がそういうと会場が一斉にざわめく。

「かっこいい」

「やりてー」

「ちょーやべえー」

おーおー、ちょいちょい放送禁止用語が・・・

隼人と迅つて言つたけ、そいつらがステージの上にあがると俺と同じ一年のやつらが危険な単語をぶちかます。

それもそのはず、今ステージの上にいる一人は眉目秀麗といつ言葉が似合いすぎるほど綺麗な顔だちをしている。そこまでは、いいけど・・・

なんで・・・なんで男が女子みたいな言動をするのか俺には理解できない。

「静かにしろ。」

シ  
ン・・・

会場全体が静まりかかる。せつときはちがい、一気に冷たい空気が漂う。

「風紀委員長、架院隼人だ。今から、守つておかなければならぬことを言つ。しつかり頭にたたきこんでおけ。」

きつい口調でそいつは言つた。が俺には関係ない。どーせ、あいつともかかわることはないだろつ。

「制服は着崩さない。チャラチャラしない。授業を抜け出さない。

喧嘩しない。学校の評価をおとさない。以上、これらのこととを守る

よつこ。守らないやつは俺が指導してやる。」

隼人は礼をするとステージをおりていく。

いやいや、今言つたこと一番守らなければいけないお前が守つてないとかそれはダメだろ。

それもそのはず、隼人はどつからどーみても、ヤンキーだ。うん、これはべつに守らなくてもなにも言われないだろう。

まじまつ・・・（後書き）

へたくそですみません！！  
温かく見守つていただけると幸いです。

ステージの上に残された、迅はさわやかではない笑みを浮かべている、と思いたいや、

「よーするにー、風紀を乱すなって」とだよねー。」

うん、説得力ね。な、この学校の風紀委員は、これなら別に裾だ  
したつてピアスしたつて何もいわれーな。迅は、いかにもつて感

色。雰囲気はチャラチャラした感じ。

「続いては、生徒会からです。生徒会のみなさんお願ひします。」

•  
•  
•  
○

?

なんだなんだなんだ?男のむせぐるしき声が体育館にこだまする。

えいじく氣持た悪し 鳥朋か・・・

女子かおめえー らは。

そんなことを思いながら俺も前を見る。

うん。意味がわかつたよ。おめえーらが騒ぐ理由が。

ステージの上にいるのは、美形、美形、これまた美形。

くそ、この学校にはなぜこんなにも美形がそろっているのか・・・。

「俺たちが生徒会だ。」

美形の一人がそう言つ。

「こんなには。僕が生徒会の書記と会計をしている暁千里あかつきせんりです。よろしくお願ひします。」

千里つていうやつは背が低く、目がくりくりして小動物みたいだ。『やつほー、みんな元気? 副会長の遠矢拓人とおやたくとだよー。盛り上がりたいこー。』

軽いかんじの拓人つて人はチャラ男だな、ピアス多くね?

「最後に、俺が生徒会長の須藤瞬すとうしゅんだ。よろしく。」

うん。なんでこんなにもかつこいいやつあつまつたのか不思議だ。

生徒会のメンバーは自己紹介だけするとステージを颯爽とおりていく。

挨拶だけでいいのか・・・ほかにやることあるんじやないのか・・・。そういうとしてるうちにあつという間に入学式は終わった。あとは、クラスでの自己紹介だけだ・・・。

こういうのは、はじめが肝心だ。この自己紹介でその先の俺の人生が決まると思つていてる。

大切に・・・平凡な人生を送るために・・・  
成功させなければ・・・

## まいづ・こまつ・2（後書き）

つたない文章ですみません。  
こんなものでよろしければ是非お読み下さい。よろしくお願いします。

入学式がおわってみんな各自とクラスに向かつ。ちなみに俺は11H.Rだ。

金持ち学園だけあって、体育館から教室までは結構ある。

特にやることがないから、後ろで会話してる男たちに耳をかたむける。

「いやー、ホントにかつここによなー、風紀委員と生徒会。おれ、副会長とやつてー。」

「俺は風紀委員長かなー。あの冷たい目で見られただけでいける。」

・・・。

なるほどね、この学園はこんなやつしかいねーんだな。  
そうか、なるほどね。ハハッ

そんなことを考へて、いのちに教室につく。

うん。広いね。すげーや。

なげやりになつてきた俺は早く席に着きたくなつたから黒板に張つてある座席表を見る。

俺の席は・・・

「窓側の一番後ろが」

誰かとかぶつた。

静かに後ろを向くとさつきステージの上にいた副会長がいた。  
だけど名前が分からない。

うーんと、えつと太郎? そんなダサくねーか・・・わつかんね な。

「遠矢拓人。お前俺の名前分かんなかつたの?」

「うん。」

「こんなかつこいい俺を・・・

「拓人君、どうしたの？？」

「千里一。俺の名前を知らないやつがいたー。」

「ホントにー！？誰？見たい。」

だんだんめんどくさくなつたから、俺は自分の席についた。  
そして眠りにつく。

足音が聞こえてくる。

「おー。おきる。」

はじまつ・・・3（後書き）

へたくそですみません。  
頑張りますのでお願いします。

「おー、おめでた。」

遠矢拓人でもなく暁千里でもなくほかの男の声だった。

「やだね。」

俺は、負けないようと言つた。

「ほつ、俺に抵抗するなんていい度胸してんじやん。」

男は楽しそうに言つた。

「ねえー、瞬、俺の名前こいつわかんなかったんだよー。びつぽつ  
～？」

遠矢拓人もこっちに来た。

「僕も顔を見たいんですね。」

暁千里もきた。

「お前、黒主鴉紀だろ。お前の秘密今こいつで言つてやつてもいいん  
だよ？」

「ひつー。」

それだけはやめてくれー。

あつ、自己紹介が遅れたな。

俺は黒主鴉紀。

実は、高校2年だつたりする。（笑）

みんな一年だつただろ。

それがちがうんだなー。

なんだかんだあつて、引っ越してきたけど、行く高校が決まってなかつたから

俺のおじさんがやつてるココ赤明学園にはいつたわけだ。

さつき、男が言つた秘密と云つのは、

俺はヤンキーだつてことだ。元ヤンだ。

しかも自分で言つのもなんだが世界一強いといわれていた最強のヤンキーだ。

なんか自分で言つて照れる（笑）

しかし、ヤンキーのままだといふころめんビーだからへんそりじているつてわけだ。

もともと、赤紫っぽい髪色だけど今は黒のかつらでダメメガネをしている。

まあ、こんな感じでばれたらいけないのである。

「それだけは、やめてください・・・。」

俺は変に逆らうと危ないと思つたから、起きた。

「――!？」

俺は、あぐびとばれることの恐怖からすこし涙目になつていた。

われながら情けがない

だけど、今、おれの目の前にいる3人は、

目を見開いたまま固まつてしている。

やばい、かつらがとれたとか！？  
あたふたしている俺に3人はいつた。

「黒主鴉紀！（くん）お前に（君に）さめたー（さめました）」

## まじめつ・・・4（後書き）

へたつくんで申し訳ござりません。

次回は、説明です。

いろいろ、設定をかくの得意な人ください。

## 説明（前書き）

今回は、物語ではありません。

## 説明

黒主鴉紀

2年生。春に転校してきた。

今は、黒のかつらに黒ぶちのだてめがね。  
それをとると、赤紫の髪（天然）。

容姿は綺麗でかわいい？とにかく美形。しかし、無自  
覚なのである。

身長は、少し小さめ？

須藤瞬 生徒会長。美形。めんべくさがりや。

遠矢拓人 生徒会副会長。美形。ピアスじゅうつ。チャラ男

暁千里 生徒会会計と書記。美形。かわいい。鴉紀にたいして  
はヤンデレ？

架院隼人 風紀委員長。美形。鬼。

赤石迅 風紀委員副委員長。快樂主義者。

登場予定

藍堂零牙 その他もうもう。

設定。

鴉紀は、春に赤明学園の2年生として転校してくれる。  
元ヤンとあつて変装中。

生徒会が2年なのは、ご想像におまかせします。  
とにかくみんな2年生という方向で。藍堂以外は。

その他、？？？といふところがあったら、まあ、自分なりに解釈をしていただけないと幸いです。

他人任せですみません。

とつあえず、こんな感じです。

また付け足すことがあるのでその時はまた、ご覧になつてください。

「はあ？？なにが

「俺はいきなりのことに対する疑惑。

「今日からお前は生徒会のメンバーだつていうんだが

わけがわからない。

「僕、書記と会計をやつてゐるから、鴉紀へと会計をやつてしまつた  
ね。」

わけがわからない。

「俺、マジでお前にのみだわ。」

わけがわからない。いや、マジで。

と、こうわけで抱呑こいつと連絡します。

「いやだ。」「なぜだ。」「どうしてもだから。」

俺の秘密を知つてゐやつなんかと一緒にいたくない。気持ち悪い。

「だいたい、なんていきなり俺が生徒会にまいるなきゃならんないんだよ。まだ、この学校のことだって全然知らねーし、そんなんで生徒会とか馬鹿だろ。」「

「そんなのカンケーねーよ。」

「そうですよ。僕は鴉紀君がいれば絶対に楽しくなると思つてます。

「

「こいつら絶対にひくきないな。

こいつらはその場しのぎにしかならないけど・・・

「わかった。少しかんがえさしてくれ。」

「わかった。」

「オッケー」

「分かりました。」

よし。とりあえず助かつた。

「安心するのはまだ早いぞ。」

「なんで??」

お前の周りは、俺らだからな。

「そんなんあああああああーー!」

よく見ると、俺の隣は、遠矢拓人、前一つは、須藤瞬と暁千里だ・・・。

泣けてくる・・・。

そんなどをしていひちこ、さらなる悲劇が。

「なあ～にやつてんのおー？」  
「わがしいが。」

こいつら、さつきの風紀委員じやねえーかよー。  
こいつらも同じクラスなのかなー！？  
助けてー。

「おつ！子猫ちゃん発見！」

俺のことか？ちがうな・・・  
でも、だんだん近づいてくる・・・  
「チコッ」

俺は素早く口をぬぐった

「ペラ、ペラ……なにするんだよおーー」の状態になす……！」

「そんなこといわなくたっていいじゃん。ブー。」  
赤石迅はそう言うが・・

「俺の……ファースト……キ……キ……ス……が……男……

だ・なんて・・・  
「

そのまま俺は意識を手放した・・・

## はじまり・・・5（後書き）

なんかホントにすみません。  
へたくそで申し訳ないです。

あと、セリフ誰がだれだかわかりませんよね・・・。  
いちおう、

鴉紀は、普通なかんじで、須藤瞬は「うだ。」みたいなかんじで遠  
矢拓人はチャライかんじ、暁千里は、敬語、架院隼人は、怖いかん  
じ？赤石迅は、軽いかんじです。わかりにくいくらいおもいます。が、頑  
張つてください。私も、がんばりますのでよろしくおねがいします。

## 危機（前書き）

あけましておめでと「ついで」こます。  
今回ばかりは短いと思ひます。

目を覚ますとそこは、すぐかつた。

かくかうし  
ノハシ一  
みかにかの  
かうし  
か  
て  
い  
か

そーいえば俺、あのあと気絶したんだよねー。

・・・。つてことは、自己紹介終わつた・・・?

卷二

俺の人生おれ二  
たああああああああああああああ  
!!!!!!

嘘だ。これじゃ、目立つじゃねえか、明日学校行きたくない。

「田舎ましましたか？」

ひょ！」ヒと顔を出したのは、暁千里だ。

「なぜだ？」

# 「俺の部屋?」

「はい。ちなみに、僕たちと同じ部屋ですよ！」

卷之三

ないですかー。

俺はまた入るなんていってなしそう!!

なんて乱暴な奴らなんだ。絶対に入らない。入りたくない！！

「つまらないなー、鴉紀君。僕は君がほしーんです。」

？曉千里の雰囲気が変わった。

「君の口から、生徒会に入ると言わせてあげますよ。」

「ううと、曉千里は、うかうか近づいてくる。・・・  
あ、ちなみに俺はベットの上にこるよー

「俺は、絶対に言わない。」

「へえー、そうやって言つてられるのも今のうちですよ。フフフ」

チユツ

「はー？」

「これは、消毒です。さっき、迅君にキスされたでしょ？」

「だからってなんでまたーー！キスなんかーー！」

「なんでって、あなたが好きだからですよ」

ドサツ

そつぱうなり俺を押し倒す。なんか、怖い。

「いや・・だ・・」

「かわいいですよ。」

## 危機（後書き）

はい、来ましたよ。初めてなので、表現とかボロボロだと思います。  
がよろしくお願いします。  
一体、どうなるんでしょうねー。

千里は、俺を押し倒すと同時に俺の服を脱がした。

「や・・だ」

「なんですか？かわいいですよ。」

裸になつた俺をじつとみてくる。

「真っ白ですね。まるで雪のようです、でもコレはピンクでかわいいですよ。」

「そうこうと、俺の突起を舐めた。  
ピチャとこやらじこ音をたてる。」

「やあ・・・やめ・・て・・・あ」

おかしい、俺の声じゃない

「あ、そうこうえば」

千里はなにか思い出したよひごひツを後にする。  
俺は今のうちだと悪い、逃げようとするが、

「逃がしませんよ。」

口は笑つてゐるが田は笑つていない。  
そんな千里に恐怖を覚える。

セツノハコヒコルハヒコヘヒビタツベハベットコヒキヅツコマレタ。

「むへ、やめてくれよー。俺は何でも生徒会になんてはこいらなう

ぐつ。「

俺を押し倒すと千里はキスをしてきた。  
千里は俺の唇を舌でこじ開けようとするが俺は負けじと口をかためる。

が、人間には酸素が必要だ。俺は息を吸おうと少しだけ口を開けた。  
・  
間違いだつた・  
・

すばやく千里の舌が俺の口内に入つてくる、  
「ふあ・・んつ・・ん・・!・?」  
舌じやないものが俺のくちの中に入つてきた。

ぐくつ

一瞬のこととでわからなかつたが  
多分、俺は薬らしきものを飲まされた。  
のんだことを確認した千里は、俺の口から離れる。  
「はあ・・はあ・・なに・・をし・・た」

息が切れている。あれ、俺こんな弱かつたけ・  
・

「気持ちよくなれる薬ですよ。鴉紀君があんまり言つことをきいて  
くれませんからお仕置きです。」

そう言つてにこりと笑う千里。

俺は、寒気を感じたのもつかの間、  
体が熱くなつてきた。

「はあ・・・はあ・・・、あ・・つい・・  
「おや、もう効いてきたんですか。」  
「

千里は冷酷な笑みを浮かべた。

はい、すみませんでした！！

グダグダだし、へたくそだし自分で書いてもつやめようとか思つて  
ました。

でも、頑張ります。

あ、ちなみにこの話は私の好きな方向にもつてきますので、どう  
ぞよろしくお願ひします。次もこんな感じなんで、「へたくそだな  
ー」と笑つて見過してくださいませ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5264z/>

---

日常な非日常。

2012年1月14日17時45分発行